

|                  |   |
|------------------|---|
| <b>Title</b>     | The Nature and Destiny of Man Volume II Human Destiny 第1章の翻訳について  |
| <b>Author(s)</b> | 鈴木, 幸   |
| <b>Citation</b>  | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.5, 2012.3 : 35-36  |
| <b>URL</b>       | <a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3862">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3862</a> |
| <b>Rights</b>    |   |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# The Nature and Destiny of Man

## Volume II Human Destiny

### 第1章の翻訳について

鈴木 幸

#### 1. はじめに

2011年7月21日（木）より、ラインホルド・ニーバー著、*The Nature and Destiny of Man*の第2巻“Human Destiny”を翻訳する会が発足したことは前回のNewsletter（21－4号）で報告した。今回は今まで行われた研究会で読み合わせ、確認をしてきた第1章“Human Destiny and History”から、翻訳をする際に問題となった点について報告する。なお本翻訳会は、日本学術振興会科学研究費補助金の基盤研究B「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」（課題番号：23320025、研究代表：高橋義文）の助成を受けたものである。

#### 2. 『人間の本性と運命』第1章

4名の研究所研究員が章ごとに担当し、翻訳を進めていることも前回のNewsletterで報告したが、第1章の担当は、聖学院大学人文学部副チャプレン・准教授の柳田洋夫氏であった。

第1章は「歴史」という概念を通して論じられる。歴史に対する人間の態度の違いは、生の意味に対する解釈の違いでもあるが、歴史的宗教においては、歴史は終末へと向かって成就されなければならないと考えられる。成就を求める歴史的宗教とは、「救済者を求めるもの」である。そして、救済者が待望される思想として「メシア信仰」が章を通して議論される。

古典的自然主義のような、非歴史的であるために非メシア待望的である文化では、人間の死が避けられないものとして語られる。しかし、歴史を自然へと解消し、生を否定するためには、人間を死の恐怖から紛らわせなければならなかったのである。そして歴史を超えた永遠という感覚がなけ

れば、歴史の感覚もない。

しかし、メシア的期待は常に利己主義的な要素を含み、歴史の意味をごまかすことで満たされることから、真のキリストは「躓きの石」でなければならなかった。人間の傲慢さが歴史を悪と罪に巻き込むが、そもそも歴史の成就是繰り返される裁きよりも、神の憐れみと神の啓示においてなされるものである。しかしヘブライのメシア信仰も、預言者が提起した問題を十分に受け入れることができなかった。それは達成できないことを達成しようとする人間の未熟で思いあがりの努力であり、もともとメシア信仰にも歴史の成就に対する答えもない。歴史においては、神の憐れみと神の怒りの関係も、混乱に対する解決策も、定かではなかったからである。

#### 3. 翻訳例

さて本グループは、原文著者であるニーバーの言葉を翻訳において等価に伝えるためにも、分かりやすく、かつ日本語として自然で偏り過ぎないように訳すことを試みるが、読み合わせの際に話題になった表現を数点、以下にあげたい。

- ・the flux of nature and time (p.1) : “flux”とは文字通りには「流れ」のことであるが、「変転」としてはどうか。
- ・more (p.4) : 比較級が使われる場合には、比較対照が分かりにくい時に、強調として使われることの可能性に注意する。
- ・reduce (p.7) : 「減る」、「帰する」、「還元する」、また「回収する」も用いられることが議論されたが、「解消」ではどうか。

全体的に言えることは、まずはニーバーがそれぞれの単語に込めた意図、つまりその単語でなければならなかったことを捉え、その意味を出来

るだけ翻訳においても移すことが課題である。

また単語のもつ多義性以上に、テキストのジャンルや言葉の使われる場所によって、訳し方も変わる。以下に、神学的規範との関わりにおいて議論された表現についてあげたい。

- ・spirit (p. 1) : 多様な意味を持つ代表例としてもあげられる“spirit”であるため、日本語においても「精神」、「霊魂」、「霊」といった訳が考えられる。しかし、“a free spirit”といった場合には、「霊」よりは「精神」ではないかと検討しつつある。
- ・the fulfilment (p. 3) : “~ of life”、“~ of history”として繰り返し使われる単語である。“fulfilment”というと「遂行」、「実現」、「達成」といった語が辞書には見られるが、口語訳聖書との親しみからも、「成就」が考えられるのではないかと議論された。
- ・Messianic (p. 4) : 「救世主の」、「メシア信仰の」という意味である。しかし文脈から、預言者アモスとの関連、歴史が終末へと向かう様、メシアが期待される様からも、「メシア待望的」や「メシア信仰」と捉えることができるのではないかと議論された。
- ・a Christ (p. 4) : 不定冠詞“a”に注意し、固有名詞の「イエス」と区別した「救い主」や「救済者」といった表現が考えられるのではないかと議論された。
- ・mystery (p. 31) : 「神秘」、「謎」、「秘儀」として訳せる可能性も話された。

ある程度の統一を図るにしても、しかし言葉の多義性を考慮すれば、必ずしもこうすべきである、とは言えないだろう。訳しながら、読みながら、その時その時に合う表現を探すことに努力を惜しまないでいたい。

#### 4. おわりに

表面的かつ断片的な見解になってしまったが、翻訳として表出される言葉には、いくつもの候補から選び出された理由として、「適切さ」と「熟

考」という特別な思いが込められることが確認された。ひとつの単語がどんなに多様な意味を持ち合わせていたとしても、文脈によってその意味もある程度絞られていくことになる。しかし、原文を解釈した上で、その後には翻訳語を探し出すという作業を経なければ、翻訳は完成されない。研究会においては後者に重点が置かれているが、しかし、原文の理解なしにはやはり訳語の選択も難しい。

翻訳とは他言語間・他文化間で行われる作業である。そして異なる言語・文化間では必ずしも「等価」が見つかるとは限らない。とはいえ、翻訳をあえて試みるからには最善を尽くしたく思い、またグループで翻訳を確認しあえるという機会に恵まれたことは、同時に原文を深く読みあう機会でもあるため、神学初心者の筆者にとっては大変勉強にもなり、心から感謝いたしたい。

---

<sup>1</sup> Eugene Nida, *Towards a Science of Translation*, Leiden: E. J. Brill, 1964, p. 107.

(すずき・みゆき 聖学院大学総合研究所特任研究員)